

論文審査の要旨(甲)

| | |
|---|--|
| 申請者領域・分野 氏名 | 総合医療・健康科学領域 社会医療総合医学教育研究分野 秋元 直樹 |
| 指導教授氏名 | 中路 重之 |
| 論文審査担当者 | 主 査 鬼島 宏 副 査 大門 眞 副 査 中村 和彦 |
| (論文題目) 過敏性腸症候群 (IBS) における腸内細菌叢の検討 | |
| <p>(論文審査の要旨)</p> <p>過敏性腸症候群 (irritable bowel syndrome : IBS) は QOL を大きく損なう疾患であり、その有病率は就業年齢層で高いため、予防法や治療法の開発は急務とされる。近年、IBS の発症には腸内細菌バランスが関与している可能性が注目されているが、未だ一定の見解は得られていない。</p> <p>申請書は、一般住民を対象として IBS と腸内細菌バランスの関係についてより詳細な検討を行った。2014 年度岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診に参加した一般住民 1012 名 (男性 394 名、女性 618 名) を対象とし、IBS 罹患の有無と腸内細菌バランスとの関連について、ロジスティック回帰分析による検討を行い、次の結果を得た：</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 一般住民における IBS 罹患リスクを検討する際に、50 歳未満の男性・50 歳以上の男性・50 歳未満の女性・50 歳以上の女性の 4 群に分けて解析することで、各群での特徴的な腸内細菌叢が検出された。 (2) ロジスティック回帰分析では、腸内細菌バランスを反映し、不安・抑うつ傾向や内臓知覚に関与することで IBS 罹患リスクが変化した (脳腸相関)。一方、脳腸相関が加齢とともに減弱するため、高齢者では、腸管粘膜局所の慢性炎症が IBS の病因となることが示唆された。 (3) 50 歳未満の男女においては Bifidobacterium (属) の増加によって、脳腸相関を介して IBS 罹患リスクが低下すると考えられた。 <p>以上の検討より、腸内細菌叢が IBS と関連する機序は、(i) 主に中枢神経系を介した経路 (脳腸相関) と、(ii) 腸管粘膜の慢性炎症を介する経路の 2 種類が考えられた。</p> <p>本論文は、IBS 発症と腸内細菌バランスの関連に焦点をあて、2 系との IBS 発症経路を提唱し、腸内細菌バランスに伴う IBS 罹患リスク変化の機序の一端を解明した内容で、学位授与に値する。</p> | |
| 公表雑誌等名 | 体力・栄養・免疫学雑誌 2016 年公刊予定 (2015 年 12 月受理) |